

氏名・(本籍地)	西 康 友 (東京都)
学位の種類	博士 (仏教学)
学位記の番号	甲第70号
学位授与の日付	平成22年3月15日
学位論文題目	法華經における方便思想の研究
論文審査委員	主査 多田孝文 副査 高橋尚夫 副査 星野英紀

## 西 康 友 氏 学位請求論文審査報告書

### 「法華經における方便思想の研究」

#### 論文の内容の要旨

本論文は、法華經 (SP) の根本的概念が「方便」であることを明らかにするものである。目次は全編4章からなる。

第1章は、概論で先行研究を中心に方便の意義と法華經に関する諸研究を概論している。代表的な先行研究を思想・成立・翻訳を三区別してその課題を論じた。法華經に関する研究は膨大であり、そのすべてに渡って検証することは不可能であるが、論者は手際よくまとめた。

本論文の第1章から第3章までのテキストとしては、先行研究の成果から主に『ケルン・南条校訂本』と鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』を用いて、特に

- (1) SP 第2章 Upāyakaṣālya は初期大乘經典の中で最古の教説の一つである。
- (2) SP の根本概念は、如来である釈尊だけが、生きとし生けるものたちすべてを、つねに tathāgatajñānadarśanasamādāpaka 「如来の知見に駆り立てる」という句にある。
- (3) SP は、第2章 Upāyakaṣālya 「方便品」をもととして構成され展開されている。
- (4) 『スッタ・ニパータ』と SP 第2章 Upāyakaṣālya 「方便品」は密接な関係がある。

の4点に注目しながら論証を試みている。

第2章は、4節を設け第1節では「原始仏教經典における方便」の概念を検証、大乘經典の方便よりもその具体的な内容が未発達であると結論した。第2節「初期大乘經典における方便」については『八千頌般若經』『維摩經』『華嚴經十地品』などの方便を検証

し、「ブツダの智慧」と「巧みな方法」という用語が同格であって同等の境地としての性質であることを論述した。第3節「般若經典系經典の論書における方便」では、『中論』『大智度論』などを用いて勝義に導くための言語習慣であり、世俗の真理であると解釈できるとし、『大智度論』の方便解釈は、独自の意義が多岐にわたることを明かしている。第4節「『妙法蓮華經』開結經典における方便」については、『無量義經』『仏説観普賢菩薩行法經』の方便を検証、ブツダの真理を示す手段方法は、実相を認識することによって獲得されることを論述した。

第3章「法華經における方便思想の源流」3節は、SP の成立過程について、いくつかの用語を根拠に法華經が段階を経て編纂された事に加えて、「方便品」が最古の教説であることを論証した。思想的な背景については「方便品」が、仏教における最古の經典とされる『スッタ・ニパータ』の教説の再構成であると論じた。

第4章3節を設け、「法華經注釈書における方便思想」では中国・日本における法華經の方便解釈は、各時代各師が、独自のよって立つ思想により自由に解釈していることを確認した。特に『法華經論』の方便解釈では(1) 外道の教説に誤謬があることを示すため。(2) 正しい事に導き入れるため。(3) 多くの疑念を断ち切るため。(4) 仏が用いる四摂法であることを論述。

中国における注釈書は竺道生『妙法蓮華經疏』、法雲『法華義記』、智顗『法華文句』、吉藏『法華義疏』などの方便解釈の展開について論述した。また、「日

本における法華経の方便解釈』では聖徳太子の『法華義疏』を挙げ、如来の方便は衆生に一理を獲得させるものと論述した。

第5章3節は本論文の各章各節での論述論証をまとめて結論としている。

### 審査結果の要旨

本論文を合格とする。法華経「方便品」を中心に方便思想を論じたものであるが、つまり法華経における方便思想は、生きとし生けるものすべてが、如来である釈尊と同一の境地になるための手段で、それはすべて、*upāyakauśalya*-「巧みな方法、方便」である。また、その *upāyakauśalya*-「巧みな方法、方便」の根元的概念は、生きとし生けるものが真のブツダと成り得た瞬間に、真のブツダではなくなるために、如来はつねに *tathāgatajñānadarśanasamādāpaka*「如来の知見に駆り立てること」である。この梵本法華経に現れる *upāyakauśalya*-「巧みな方法、方便」は、初期大乘経典の最古の教説の中の一つであり、法華経の根本概念はすべて、*upāyakauśalya*-「巧みな方法、方便」に端を発しているのとまとめている。

まず、第1章は概論で先行研究を論じている。法華経の研究は膨大であり、そのすべてに渡することは不可能であるが、手際よくまとめ、方便思想研究の意義について述べており、大旨妥当な論述である。

第2章は法華経以前の初期大乘仏教経典である「八千頌般若経」「維摩経」「華嚴経」などを精査し、その方便の語義を探っている努力が認められる。ただし、コンピューター検索の結果と思われる膨大な羅列の面も見られるので、整理の上でのさらなる論述が必要である。

第3章は法華経「方便品」の研究であり、本論文のメインである。法華経「方便品」の成立を巡って、「方便品」が法華経のメインであり、法華経の成立にとっても重要な源泉となっていることを論じている。法華経の成立過程の痕跡を示す用語 (*Saddharmapuṇḍarīka*-、*dharmaparyāya*-、*śūnya*-、*śūnyatā*-、*anupattikadharmakṣānti*-) を根拠に、法華経は歴史的段階を経て編纂され法華経の最古の教説が方便品であることを論証する方法論は興味を持てるものであった。また、「方便品」はその教説の前半が梵天勧請の説話や初転法輪の説話を素材とし、釈尊の成道から初転法輪という歴史的事実を時系列に再現していることから、仏教の中でも最初期の教説が保存されていることを確認した上で、仏教における最古の経典とさ

れる『スツタ・ニパータ』のいくつかの教説に注目し比較した。結果「方便品」が『スツタ・ニパータ』の教説を再構成していることを論証したことは評価できるものがある。

1章より、この3章までは主にサンスクリット文献を使用しているのであるが、誤読と思われる部分もあり、いくつかの訂正を必要とする。また、チベット語訳に一切触れていないのも難点であるが、多くの資料をサンスクリット・漢文・和訳を列挙し、その典拠を明確にしているところは努力の跡が見られる。

第4章は、インド・中国・日本の注釈書における方便解釈の展開についてである。第1章から3章である梵本文献の語義的な論証方法を引きずってしまった感があり、いますこし、各節の法華観と方便思想に踏み込むことが望まれる。取り挙げた三国の諸註書・諸師の思想のみではなく、広く検証することも今後の重要な課題となる。

例えば中国隋智顛の法華思想について、論者が取り上げた諸師のそれを比較し、特色を検証すること。日本の代表として聖徳太子だけに注目しているが、さらに日本について聖徳太子だけを取り上げた理由は如何。日本仏教と文化ほど法華経の影響を受けた国は他にないことを考慮すれば、各時代各師の法華観にも論究すべきであった。

論証不足の部分があるが、今後の研鑽に期待のもてる論文であり、課程博士学位論文として評価できるものである。